

RADIOACTIVE GHOST HOUSE

行方不明者の家

成定 由香沙

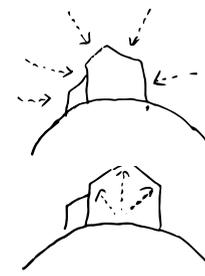


私は建築と映像を表現の媒体とする探求を進める中で、自身が鬱病に罹患したことをきっかけにトラウマや精神分析、そして医療写真を含むその表象についてを広範に研究と制作をしてきた。一見して繋がりがない「映像」「放射線技術」「精神分析」は全て20世紀初頭に発明され、事物や心を透明化する同時代の「没視覚性」の本質的な技術であると論じられている。1『行方不明者の家』と題された本作品は、1895年のヴァルヘルム・レントゲンによるX線の発見を始まりとする20世紀以降の原子力技術によって地球規模で発生したトラウマを背景としている。第二次世界大戦中マンハッタン計画において核技術の開発エリアとして発展したアメリカのハンフォード・サイトで1998年に広範囲に影響を及ぼした放射線汚染事故は核施設の樋にハエが卵を産みつけたことが原因であったとされ²、物理的な境界としての建築が担保していた安全性の限界を示した。ハンフォード・サイトでは第二次世界大戦を経てその全てを廃炉とする選択をとったが、その地表は放射能によって完全に汚染され、生身の身体では立ち入ることができなくなっている。『行方不明者の家』と題した7つの建築物はこの菌を輪郭として引用し、原子炉が存在したはずの内部を作りかえ、スケールを変えながら都市の中に挿入することを想像する。ダニエル・リベスキンドが「シティ・エッジ」をナチス「ベルリン計画」の破壊として計画したように、地球上のある領域を「核の都市」として作り替え、またある都市を壊滅させるに至った暴力的な歴史に対し、場所を問わず点在させるといった都市的な規模の暴力性を持ち込むことによって対抗する。新たに地表を覆う「トラウマ」としての建築は、埋め尽くすことは決してありえない歴史の空洞を継承していく試みである。

TO ANY FUTURE FORM THAT
WILL BE ABLE TO PRESENT
ITSELF AS AN INVISIBLE

1 - BACKGROUND THE GREAT INVISIBLE 不可視の巨人

“それらは、恐怖や偶然の感情において、私たちに漠然と姿を表すのだ”
André Breton, LES GRANDS TRANSPARENTS, 1942



原子炉の輪郭についての概念図

1-1. 放射性ジオ・トラウマ

アンドレ・ブルトンは「シュルレアリスム第三宣言」において、「透明な巨人」という神話をかいた。巨大で我々の目には見えないが、そこかしこに存在し、人間の運命を誘導するもの。これは現代において「ハイパー・オブジェクト」と呼ばれるものたちのことを想像させる。人間の処理できるスケールを超えた、ブラックホールやコロナウイルスによるパンデミックなどがその例である。その中でも、放射能に着目したい。第二次世界大戦終戦前に描かれたセリグマンによる「透明な巨人」と呼ばれる絵画と戦後、原爆の被害を知って描かれたマックによるイラストはどこか似たような構成をしている。(同時代の画家であるヴォルフガング・パーレンが芸術的な「想像力の解放」だけが、新たな(非)現実に対処するために必要な「視野の拡大」をもたらすことができると思っていたことも印象的である。)初めは人類のロマンでも、たった一つの事故が地球規模での被害を招く。しかも、目に見えない形で。それは「スロー・バイオレンス(遅延性の暴力)」と呼ばれ、世代を超えて影響を及ぼす暴力として人間が過ごす時間的スケールをはるかに逸脱している。この「巨人」を自らのものにするために人間は原子炉を作った。原子炉とは建築としての原義的な役割として雨風から内部を守りながら、汚染の広がりを防ぎ、それ以外の全ての世界をも守っている極めて象徴的な輪郭である。

1-2. 痛みとともに生きる

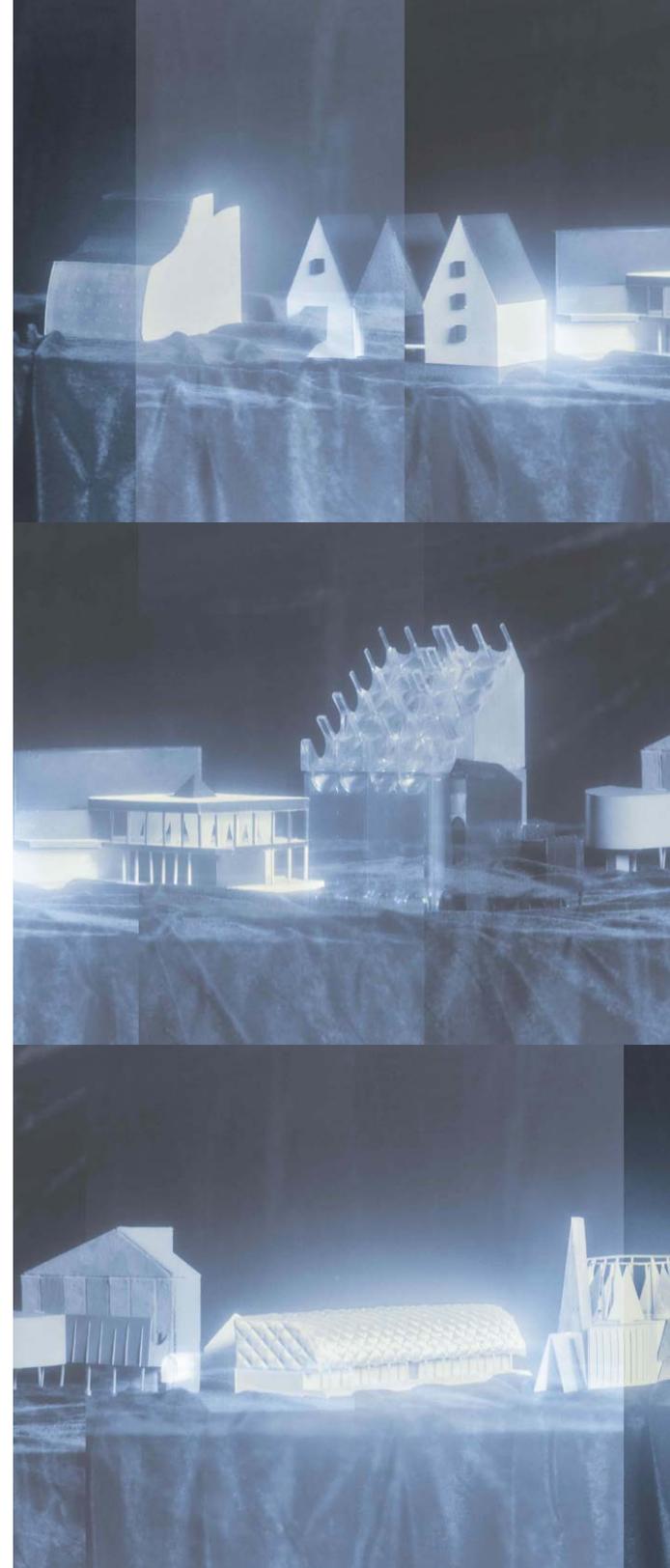


PHOTO BY TAKUYA MATSUMI

京都芸術センター Co-program 2023
ガレリー - 展覧会案内「Ground Zero」
京都芸術センター ガレリー 北・南 2023/11/11(土) - 12/10(日)
10:00 - 20:00 入場料: 無料 参加作家: Iden Sangound Kim, Maya Erin Masuda, Rui Yamagata, Celeste Viv Ly, Yukasa Niitsada

Ground Zero: グラウンド・ゼロとは、もともと核爆発やロケットの爆発現場を指す言葉で、マンハッタン計画以降に用いられてきたこの言葉は、現代において、瞬かいた未来喪失を象徴すると共に、その代償によってたらされた「何もない場所」として複雑な持った言葉として用いられています。2021年3月より始まったロシアによるウクライナへの侵襲は、大量の人命被害を招き出すなど、核の力、核兵器に対する疑念を再び燃やした。失われたものは身体や物質だけではなく、ロシア音楽家によって作曲された曲の演奏の聴感など、侵略であるロシアに対する国際的な絶望は結核、特定の土地に纏わる文化や歴史、人々の記憶やアイデンティティといった複雑な関係性の網目からも消滅させることとなります。ここにおいて、地層を含めた人間を超えた層に対して我々人間はたまた「ジオ・トラウマ」は、歴史という物質から成り、文化や記憶といった精神的領域にたいしても巨大なグロイドを制作する事象を結びつけるのです。本展は、こうして2019年以降ロシア返還に作り出された物質的・非物質的なグロイド・スペースを、現代における新たなグラウンド・ゼロと捉え、その痛みを共有を試みるものです。本展に参加する5人のアーティストは、フェノタイプでの装置や時代時代に馴染み深いデジタルメディアの映像を、編織・彫刻・放射線汚染やデジタルの複製原子炉に纏わる事象など、それぞれの個人の存在に深く纏わる事象の延長として捉え、場所やジオ・トラウマを地理的・文脈的に中心化する中で、物質的な距離の想像力を超えて自分の内部に引き寄せようとする。滞在制作と並重なるアップデートを含んだリサーチ・プロセスのこの実践を通して、観客のアーティストが引き受けた痛みと共有するの痛みを学ぶこと(Un-Learn)ことは、問題を越えていかなる痛みの、痛みの問い込み、また記憶による小さな無数の痛みの記憶に引きよけられるでしょう。(キュレーター: Maya Erin Masuda)

2023年11月から始まった京都芸術センターでの展示「Ground Zero」では、本設計の構想段階からおよそ一年がかりで出展者同士での議論を重ねてきた。本設計を進行中のプロジェクトとしてここに展示し、フィードバックを踏まえ、ブラッシュアップを続けた。また展示期間中は各分野の専門家とともに全4回にわたるトークイベントを実施。(各回ゲスト:五十嵐太郎氏(東北大学大学院教授、建築史家・建築批評家)、Lucia Pietroiusti(ルチア・ピエトロイウスティ、キュレーター)、Susan Schuppli(スーザン・シュプリ、アーティスト・リサーチャー))卒業設計「香港逆移植」(2021)から続く、ある部分において傷となり残った歴史的な事象、あるいは思想をどのように語り継ぐことができるのかへの探求において「引き受けた痛みとともに生きるための術を学びなおす(Un-Learn)こと」(展覧会パンフレットより引用)を意義とした本展覧会での一連の学びを本作品の背景としている。



2 - PURPOSE RADIOACTIVE VOID

放射性ヴォイド

2-1. 福島第一原発および大熊町視察



「Ground Zero」展の企画の一環として福島県へのリサーチトリップを実施。「Ground Zero」というテーマのもと、衛生写真・冷却・アーカイブ・皮膚・放射能といった各自の制作テーマを持ったアーティスト5名で現地を視察した。1日目は大熊町にて、震災にてご家族を亡くされ、現在現地で語り部として活動されている木村則夫氏の案内のもと、避難区域を歩いた。2日目は福島第一原発を見学。厳重な警備と被曝対策のもとに見学を行った。施設内はセキュリティの問題上撮影可能なエリアが厳しく定められ、監視カメラなどが一切映り込まないよう、職員らによって徹底的に管理されていた。最も印象的だったのが原子炉に残った使用済み燃料貯蔵プールが奇妙な青色をしていたことである。その正体は「チェレンコフ光」であり、それ自体が発光していた。我々の元に光を届ける原子炉の中心に、こんなにも美しい光が残り続けていることに複雑な気持ちを感じる。

2-1. ハンフォード・サイト



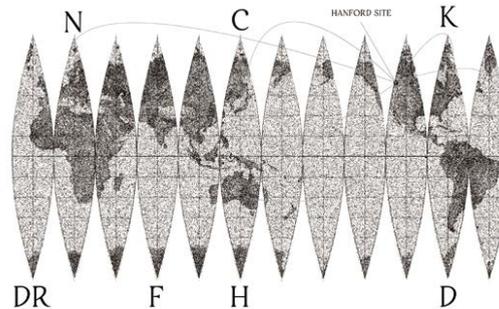
ハンフォード・サイトの配置図。北側にまとまっているのが原子炉。川を挟んだ向こう側は国立公園となっている。

第二次世界大戦中、マンハッタン計画の一部として核施設群として開発されたアメリカ・ワシントン州にあるハンフォード・サイト。44年間にわたりプルトニウムの製造を行っていたことから現在でも大量の放射性物質が地中に残り、「世界で最も汚染された地域」と言われる。当時は1500万人の人々がここで働いていたが、そのほとんどの人が何のための作業なのかを一切知らされず、中には実験として被曝させられた人々も存在した。ここには全部で9つの原子炉があり、そのうち7つにおいて除染作業が進められている。高度な技術と巨大な権力の象徴だったハンフォードの原子炉跡地はその多くが解体され再び元の砂漠地帯のような更地へと戻っていった。彼らにとっての輝かしい未来の象徴だったハンフォードだが、甚大な放射能汚染被害を受け、もはや元の砂漠のような様相を持った全く別の場所として存在する、「グラウンド・ゼロ」となっている。それは地球上に発生した1550平方キロメートルにも及ぶ大きな大きなヴォイドである。

<参考>
Harvey, D W. History of the Hanford Site: 1943-1990. United States: N. p., 2000
Gabriele Schwab, Radioactive Ghost, Univ of Minnesota Pr, 2020
Roy E. Gephart, A short history of waste management at the Hanford Site, Physics and Chemistry of the Earth, Parts A/B/C, Volume 35, Issues 6-8, 2010
Gabriele Schwab, Radioactive Ghost, Univ of Minnesota Pr, 2020

3 - METHOD THE COCOONS AND GHOSTS

繭と幽霊



右：ハンフォード・サイトを起点として世界中に散りばめられる「繭」の概念地図

3-1. Cocooning - 繭化

「中間安全貯蔵 (ISS : interm Safe Storage) の除染と解体」と呼ばれるこの作業は別名「繭化 (Cocooning)」とも表現される。具体的な作業としては、極めて高線量のグラファイトブロックの炉心を中心とする部分のみを最小限に厳重に遮蔽、密封し、その他の部分は全面的に解体更地化する。75年以上の中間貯蔵により放射能の減衰を待った後に解体を行い、最終処分がこの間に決定するとされている。繭とは通常弱い状態にある、あるいは活動を停止している状態の生き物を包み込み保護する覆いのことを指し、特に多くの場合蚕が蛹の状態にあることを示している。丹下健三の「コクーンタワー」のように、これからの未来への期待の象徴として用いられることもある。しかし、この原子炉が纏う「繭」は、その内部が死にゆくことを待たばかりである。再び自由な土地となるまで一体何年の時がかかるのだろうか。放射能が「ハイパー・オブジェクト」と呼ばれるように、人間のもつ時間的スケールからは大きく逸脱している。人間が技術として手にすることを旨とした放射能が我々が管理し続けられない限り人間自身を脅かす存在となった様は、人間なしでは存在しえない蚕のようである。現代ではプライバシーや逃亡の観点から自宅に引きこもることを「Cocooning」と呼ぶこともある。

<参考>
25. デコニュース 11号、ハンフォードでの成功話。(原子力施設デコミッションング研究会, 2000)

3-2. 繭と幽霊

ギリシャ語で「trauma」は「傷」を意味し、1887年に心理学者であるピエール・ジャネによって心的外傷を比喻する語として提唱された。ベトナム戦争での生死に関わる強烈な体験を通したPTSD(心的外傷後ストレス障害)によってその認識は一般的となったが、現在では複雑性PTSDと言われるような継続的なストレスによって発症することもある。トラウマは目の前で起こった出来事を、直接体験するというよりも、そのままの意味をとらえられないままに遅れをとって逃してしまう状態である。この出来事の感覚的遅延による異物と身体の重なりがトラウマという状態であるとして、『行方不明者の家』はトラウマとしての建築の形態を想像する。遅延性を持った身体は、トラウマ状態にある、予測不可能で固定化されていない多次元的なものとして、過去とありえるかもしれない未来における存在の複数的な時間制と展開を示す。本作品では、この「繭」を輪郭として引用する。それはまるで著名人の像を作る時のような、ある意味で彫像的なプロセスである。引用されたそれぞれの「繭」の輪郭は、スケールを変えながら世界中に機能を持った建築を内包しながら点在する。それは「繭」の輪郭が極めて匿名的であることにより実践される。自然と超自然を繋げる「幽霊」とも呼ばれる放射能。トラウマが蘇ることを幽霊が出没することに例えて「Haunting」と呼ぶ。この二つの幽霊的な要素がこの建築を「Radioactive Ghost House」と呼ぶ由縁である。例えば、これが破壊される未来があるとすると、しかし、このプロジェクトはまるで白い布をかぶって二つの穴を開けたオバケが別の身体を見つけるように、「繭」が新しい中身を見つけることで存在し続けるのである。光の家、幽霊としての建築。

<参考>
Gabriele Schwab, Radioactive Ghost, Univ of Minnesota Pr, 2020
小塚幸、オーロラ・ヴェリリオのトラウマ的メディア論に向けて。メディアウム(3) 特集 ボール・ヴェリリオ, 2022
Rachel Pain, Geotrauma : Violence, place and repossession, (Progress in Human Geography, 45(5), 2021)



4 - RADIOACTIVE GHOST HOUSE

行方不明者の家

4-1. 自閉的建築

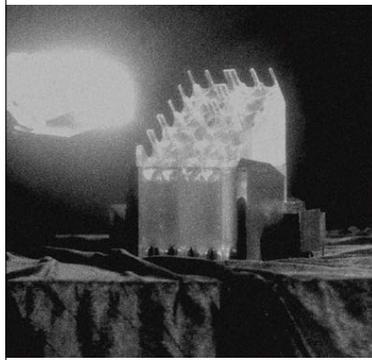
原子炉はその建築の内側と外側を（つまり地球上の全てを放射能汚染から）同時に守る極めて象徴的な輪郭の一つである。それは役目を終えて「繭」として新たな形態をまとう。本作品では、この「繭」を輪郭として引用し、全く別の建物として設計する。それはいわゆる著名人の彫像を作るような手つきと同じく、ある文脈を持った形態をそのまま外郭として引用している。窓のない原子炉を建築として転用するにあたって、内部の機能は全て劇場としている。外側は匿名的な形態を有しながら極めて強力な文脈を背負う。それに抵抗するように内部は独自のものとして存在する、自閉的な建築である。

4-2. ト라우マとして

「ジオ・トラウマ」は、どちらの側にも還元されない暴力性を受け入れることで人間と非人間を繋げる思考の手助け⁹となるものである。ダニエル・リベスキンドが《シティ・エッジ》をナチス「ベルリン計画」の破壊として計画したように、地球上のある表面を「核の都市」として作りかえ、広島・長崎を破壊した暴力的な歴史に対し、『行方不明者の家』はトラウマ的「ずれ」を設計し、都市の中に点在させるといふ暴力性を持ち出す。トラウマは、その侵害が精神的本能や衝動の形で内面から生じる刺激によっても起こりうるとされる。同時にそれは何が内側に属し、何が外側に保たなければならないかについて最終的な決着がつかないことを意味する。トラウマ状態における内部の異物/侵害による衝動は、過剰な強さとして自らを主張し、それによってあらゆるシステムや組織の形態が異なる（予期せぬ）方法で自らを再び主張する、終わりのない入れ子状態へと続いていくのである。

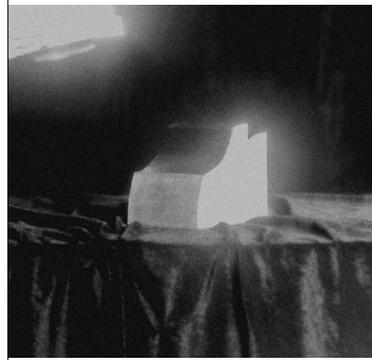
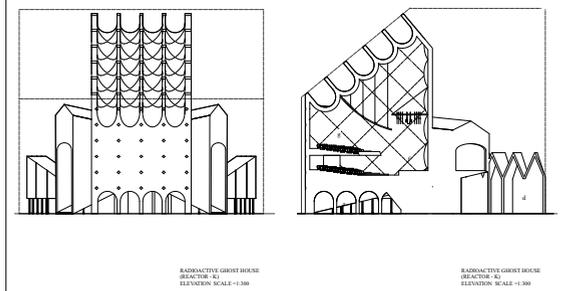
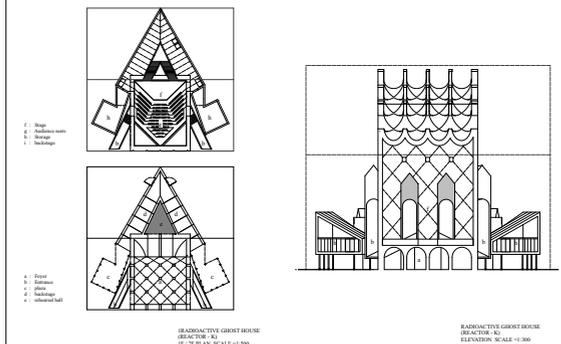
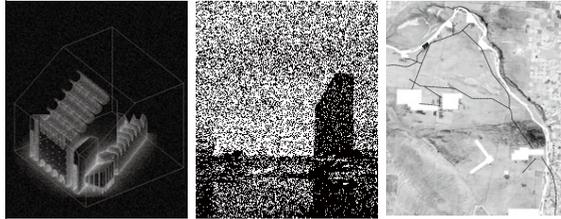
4-3. 光のための家

この作品は、この目を見た、廃炉になった原子炉に残るチェレンコフ光から始まる。役目を終え、形骸化した「繭」の中に残る、もはや誰もその目で見ることのない光。そこで作り出された光によって我々の生活が照らされていたように、今度は幽霊となった光が世界中へと飛び散って行くのである。誰も入ることのできない不可視の内部への想像力によって描かれるこの7つの建築群は、「Radioactive Ghost」、すなわち「(放射性的) 行方不明者」となった光のための家(=劇場)なのである。劇場(=ハウス、小屋)は、強力な原子炉の文脈を外殻として背負いながらいくつもの物語を投影する。



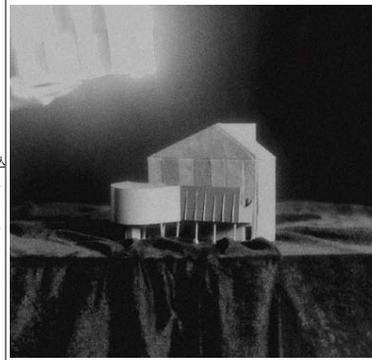
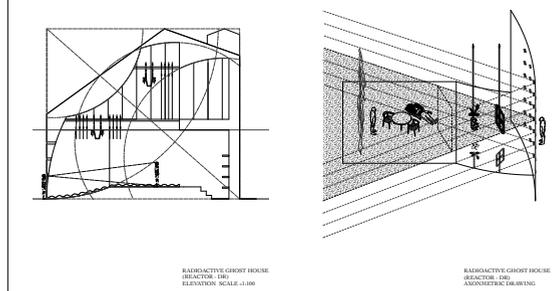
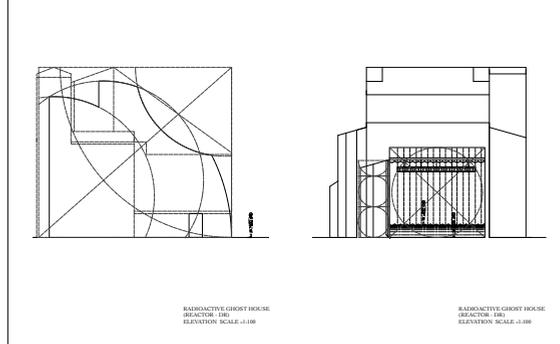
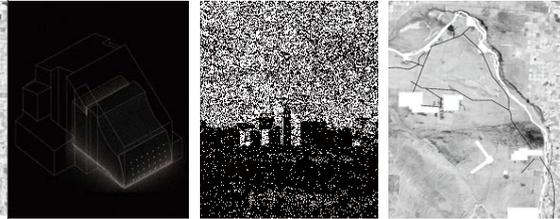
REACTOR-K

Kは最も新しい繭であり、原子炉を全て覆っている。9つの中でも最も大きい部類の原子炉である。内部には演劇のための劇場が入り、斜めの屋根を支えるようにヴォールト形状が用いられている。ヴォールトとしての意味をキャンセルし、完全な左右対称としてある種のバグのように埋め込まれる低層部。



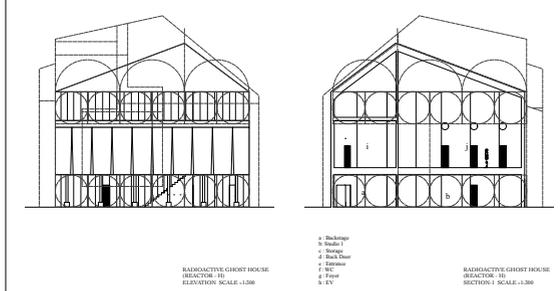
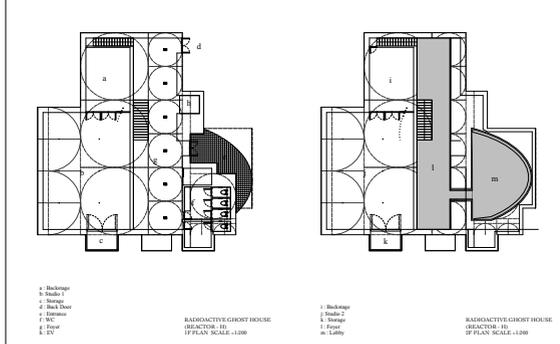
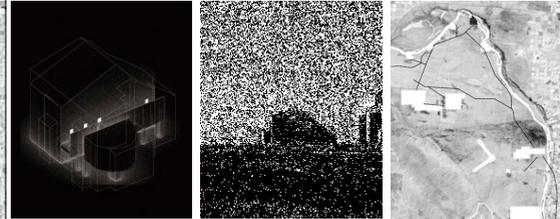
REACTOR-DR

住宅スケールへと変換したDR。これは都市の中に入り込んだ覗き見の劇場である。通常、覗き見の劇場は見ると見られるものの関係性が強固であるが、ここでは見る主体は都市の中へと暴露状態にある。一度壁に設けられた小さな穴を除けば、「繭」は一切見えない、不可視の存在として立ち現れる。



REACTOR-H

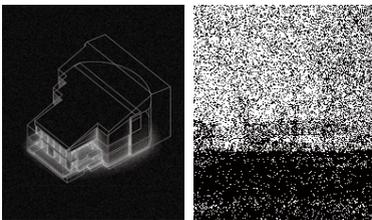
小規模の劇場で、舞台装置はほとんどない。与えられたのは1枚のドアだけである。レクチャーパフォーマンスなども想定しており、観客も存在しない。いつの間にか、ぞろぞろと集まってきた観客の中からセリフが飛び出す。いつしか演劇が始まって、観客も演者もまぜこぜ。また終わる頃にほたけの一つの集団に戻っているのである。





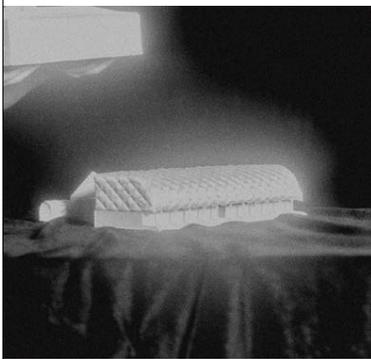
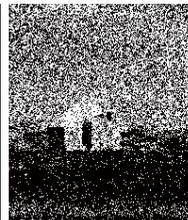
REACTOR-C

壁のない能舞台。実際の劇場部分は開放的で壁はなく、カーテン1枚でしか隔たれていない。1階のホールの観客の足音、隙間風の音、聞こえそうで聞こえない声、あらゆるここで現象が能を引き立たせる背景となる。



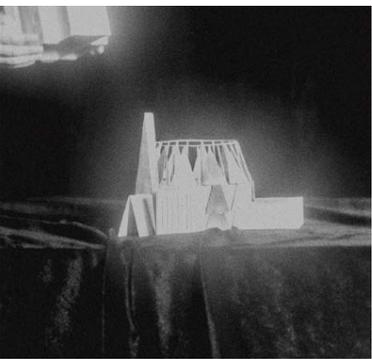
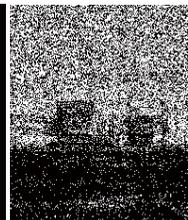
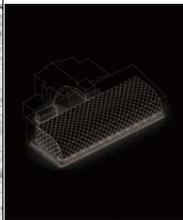
REACTOR-D

中央にステージがあり、左右に客席があるタイプの劇場。控室などのバックスペースは地上階にある。家形が連続した見た目であるが、中心が抜けている。あるはずのところにあるべきものがない、構成的な不在の象徴としての家形。



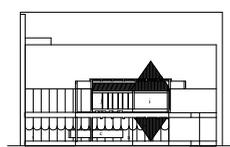
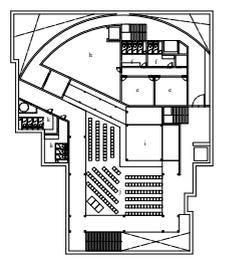
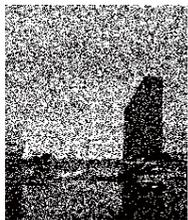
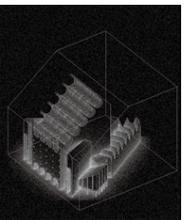
REACTOR-N

3つのスクリーンを有した映画館。大きなキルティングの外装にはガラスの留め具がされており、これがロビーに窓として姿を表す。通常外装材では用いられないシルクを選定。



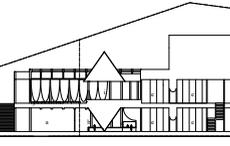
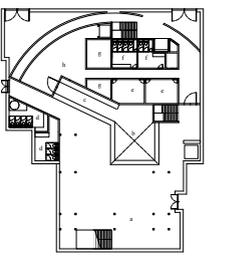
REACTOR-F

中央にステージがあり、それを囲うように客席が設けられている。それらの周りには光の柱が照明として立っているが、ひっぱりあげられ浮いている。構造的な記号のキャンセル。



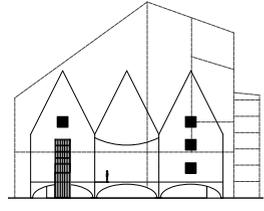
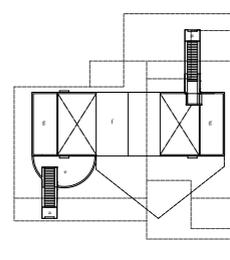
- 1. Reception room
- 2. WC
- 3. Backstage
- 4. Lobby
- 5. Stage
- 6. Audience room
- 7. WC

- a. Stage
- b. Backstage
- c. WC
- d. Lobby
- e. Audience room
- f. WC
- g. Backstage
- h. Reception hall



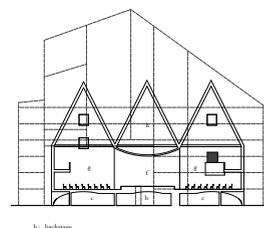
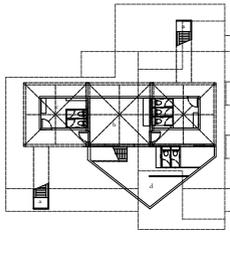
- a. Reception room
- b. WC
- c. Backstage
- d. Lobby
- e. Stage
- f. Audience room
- g. WC

- a. Stage
- b. Backstage
- c. WC
- d. Lobby
- e. Audience room
- f. WC
- g. Backstage



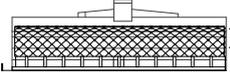
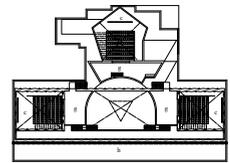
- a. entrance
- b. lobby
- c. stage
- d. audience room

- a. entrance
- b. lobby
- c. stage
- d. audience room



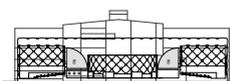
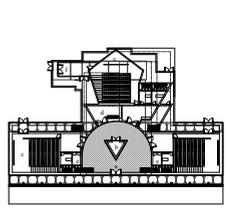
- a. entrance
- b. back stage
- c. WC
- d. dressing room

- a. entrance
- b. back stage
- c. WC
- d. dressing room
- e. lighting box



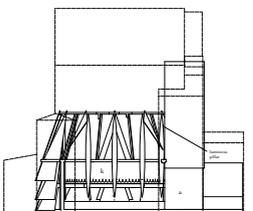
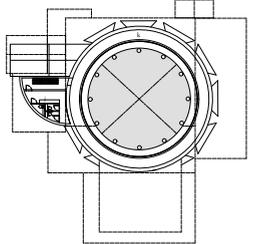
- a. Cinema
- b. Screening room
- c. lobby

- a. Cinema
- b. Screening room
- c. lobby



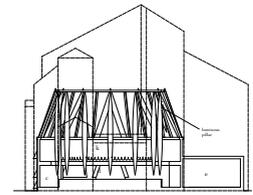
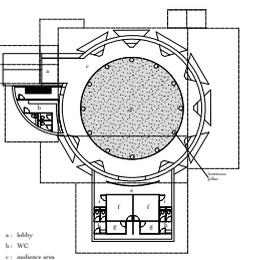
- a. Stage
- b. Backstage
- c. Cinema
- d. WC
- e. Back stage

- a. Stage
- b. Backstage
- c. Cinema
- d. WC
- e. Back stage



- j. WC
- k. audience

- a. lobby
- b. audience area
- c. stage
- d. audience area



- a. lobby
- b. WC
- c. audience area
- d. stage
- e. dressing room
- f. storage
- g. WC
- h. WC
- i. storage

- a. audience area
- b. back stage
- c. audience area

